

ガラパゴス諸島



進化論の島 — 恐竜時代が目の前に —

つい先ごろ、朝日新聞でガラパゴス諸島を特集していました。近年、島の生態系が乱れてきていることを紹介したりレポートです。

もう20年余りも前になりますが、聖教新聞のパナマ特派員だったとき、私もこのガラパゴスを訪れたことがあります。たしかに昔といえば昔のことですが、何万年も同じ姿を保ってきた島から考えてみれば、20年なんて10両連結電車の1本の吊り革の幅にも満たない時間になるわけです。



南米大陸から西に千キロ。赤道直下の太平洋上に浮かぶエクアドル属領の火山群島で、大小60の島と多数の岩礁からなり、地球の創世記をほうふつとさせるたたずまいを見せています。総面積約7844平方キロ。人口2万人あまり。

ガラパゴスの名前はスペイン語の「亀」からきています。甲羅が2mに近いゾウガメ。恐竜時代の名残を思わせるイグアナ。アザラシの大群。至近距離に近づいても逃げようしない鳥類。地球上でここしか生息していないという貴重な生物……。ユネスコは1979年、同諸島を「世界の財宝」と指定しました。このガラパゴスに上陸したイギリスの生物学者チャールス・ダーウィンは、同じ種の動物が島々によって異なることに気づき「進化論」を唱えたのです。

エクアドルの首都キトから飛行機で西に飛び、島に降り立ちました。海拔2800メートルから一気にゼロへ。同じ赤道直下なのに、涼しかったキトに比べ熱暑の気候。ガラガラと照りつける太陽が容赦なく肌を焼いてきます。なんという過酷な自然の景観！そこには人工のものは何もありません。サボテンが点生する乾ききった溶岩の砂場。そこは、自然が、そして歴史がすべてを支配していました。



ダーウィン研究所ではゾウガメが5匹ほどゆっくりと歩いていました。年齢は百歳をはるかに超えていると思われます。その足元を小さな陸イグアナが駆け抜けていく。地球の創世と人類の誕生、生物の進化、そして進化論と永遠の生命との関連性——興味は尽きません。

次々と眼前に映る景観と動物に、やや興奮気味でカメラのシャッターを押し続ける私の手はじっとり。額には玉の汗。巻き終えたフィルムも入れ替えなければなりません。一瞬の涼を求め、5メートルほどの背丈のサボテンの陰に腰を下ろそうとした私は「ウヒャーッ」と声を上げて飛び退きました。シッポを踏まれた体長50センチほどのイグアナが、モゾモゾと顔を持ち上げ、恨めしそうに私をにらみすえたのです。

